

< 国内情勢 >

【自民総裁選と衆院総選挙を展望する】

自民総裁選に波瀾は起きるか

菅義偉が総裁選に出馬しないと表明。総裁選の行方が混沌となり始めた。勝利する者は誰か。そして総選挙はどうなるのか？

菅義偉「総裁選出馬せず」は予定の行動か

菅義偉が総裁選出馬を見送ったことは想定外の出来事のように報道されている。周囲から梯子を外されたとか、罾にかけられて表に放り出されたなどといった陰謀論めいた話もある。だが、今になって思えば、これは予定の行動だった可能性もある。菅義偉は歴代最長の官房長官だった。官房長官の在職期間は **2822** 日間。第二位の福田康夫が **1289** 日だったことを見ても、異常な長さだった。

多くの政治家は首相になることを目指し、それを公言するものだが、菅義偉はかつて一度も「首相を目指している」と口にしたことはなかった。ひたすら実直に安倍晋三を支える官房長官を務めた。

昨年夏に安倍晋三が体調不良を理由に政権を投げ出したとき、突如として総裁候補となり、国会議員票・都道府県代表票で圧倒的多数を獲得して総裁に就任した。当時、安倍晋三はモリ・カケ、桜問題で進退窮まる状態に置かれていた。

更に「盟友」だったトランプが大統領選に苦戦することが予想され、国際舞台の場でも立場が苦しい状況になることが予想された。政権を「反安倍」陣営に渡せば、コロナ拡大の中、政治的混乱は避けられない。そこで急遽、安倍政権を支え続けてきた官房長官・菅義偉の登板が画策されたと考えるのが妥当だろう。

従って昨年9月の時点で「菅は1年」とする案が自民党主流派の力で作られたと思われる。つまり菅は、陰の総理・安倍晋三の代役として総理の座に就いていた。最後の最後まで実直な官房長官を貫いたと言えるだろう。

併しながら自民党領袖としては器が小さすぎた。いずれにせよ菅が自民党総裁に選出された時点で、菅義偉の任期は1年、2021年総裁選は岸田文雄にするとの了解があったと思われる。昨年の総裁選の得票、菅義偉 377 票・岸田文雄 89 票・石破茂 68 票がそれを物語っている。3A（安倍・麻生・甘利）は何としても石破茂に政権を渡したくなかった。岸田を2位に押し込んだのは「菅の次は岸田」という計画だったか、あるいはその計画で岸田を納得させたのだろう。

敵の大將が消えて目標を失った野党

菅義偉が総裁選に出馬しないことは、野党にとっては大誤算だった。今回の新型コロナ騒動は正直なところ、誰が政権の座に就いていようが、抑えられるものではなかった。日本のコロナ対策は世界の中では優れていると言える。世界が全滅状態の中、何とかしのいできた感がある。新型コロナは世界中のどこでも初体験の出来事であり、最善の手段は誰にも判らなかったのが現実である。

昨年、GoTo キャンペーンを始めたとき、コロナを蔓延させる恐れがあると野党は反対した。政権が GoTo キャンペーンを中止すると、今度は、旅行・観光業が打撃を食らったと文句を言う。非常事態宣言に対しては、宣言発出が遅いと文句を言い、宣言を出せば地場産業の危機だと騒ぐ。野党はひたすら政府が繰り出す政策に反対し続けた。反対するだけで、コロナ対策に関してまともな提言を出せなかった野党だが、それも仕方のないことだ。なにしろ誰も正解を知らないのだから。

今回の自民党総裁選に関し、野党は当初、「総裁選などを行っている場合か」「菅は責任を取って直ちに辞任すべきだ」（立民・枝野代表）と口にしていたが、菅が総裁選出馬を見送ると「無責任だ」と怒る。政権に反対するだけで、何の政策も提示できないことが明らかになった野党には、国民の誰もが愛想をつかしてしまった。「総裁選を戦うには相当のエネルギーを要する。総裁選は不出馬とし、コロナ対策を全うしたい」という菅義偉の言葉に、野党は敗北した。

これまで菅を叩き、菅の政策に反対してきた野党としては、菅という攻撃目標を失ってしまった。10月末か11月には総選挙が行われるが、この状況では野党が躍進する芽はない。とはいえ、自民党が圧勝するようなことにもならないだろう。そうなるとやはり、衆院総選挙より自民党総裁選に注目が集まる。

総裁選に立候補するのは誰か

総裁選の日程が提示されたとき、いち早く手を上げたのは岸田文雄だった。

岸田は党役員の任期を3年までとする案を提示し「**自民党を若返らせます**」と胸を張った。82歳の二階俊博が5年も幹事長をやっていることへの批判も含まれ、中堅・若手の大胆な登用を掲げて菅義偉に対抗するつもりだった。この時点での岸田の立候補表明は、機先を制する意味もあり、順当にいけば「**菅対岸田**」の構図の中で、岸田が優位に戦いを進められるはずだった。

岸田は自民党の名門・宏池会に属している。宏池会とは池田勇人が立ち上げた会派で、大平正芳・鈴木善幸・古賀誠に引き継がれた名門。岸田自身は台湾の政治家と繋がりが強く、一方で親分だった古賀誠の縁で中国要人とも太いパイプを持つ。アジアに主軸を置くという意味では安倍晋三と異なり、ある意味で新鮮味がある。菅が出馬見送りを発表するまでは、次期首相は岸田で決まりといった雰囲気が漂っていた。ところが、菅の出馬見送りで岸田の立場は一気に悪化した。党役員任期3年という公約が意味を持たなくなったばかりか、「**岸田では新鮮味に欠ける**」との雰囲気が強まっている。岸田陣営は今後、新たな力強い政策を掲げて再スタートを切ると思われるが、巻き返しは苦しいだろう。

宏池会の傍系の麻生派から、河野太郎が立候補の意向を表明している。マスコミ報道によると、河野の立候補について領袖の麻生太郎は「**自分で判断しな**」と声をかけたという。以前から麻生は河野太郎に厳しく、麻生派全員が河野支持に回るかどうか微妙。また河野が「**反安倍**」の色が濃い点もベテランから煙たがられている。だが河野の突破力は評価が高く、自民党若手グループの人望もある。安倍晋三が高市早苗の支援に回ると意思表示をした。

高市早苗は「安倍ガールズ」の一人で、平成18年(2006年)の第一次安倍内閣で内閣府特命担当相に抜擢され初入閣。第二次安倍内閣、第四次安倍改造内閣でも総務相に起用され、安倍晋三とは非常に親しい。安倍晋三路線の継承者として、3A(安倍・麻生・甘利)が連携して高市を推すことも予想される。初の女性宰相に対する期待値もあり、若手グループが河野から高市に鞍替えする可能性も想定される。

まもなく5回目となる総裁選立候補を正式表明するのが石破茂だ。

「反安倍」の筆頭格であり、モリ・カケ・桜の再調査を口にするなど、その意欲は衰えていない。二階幹事長からは「出るならしっかりとやれ」と応じられたという。世論での人気は高く、地方票に強い。「次の首相」調査ではいつもトップ争いをしているが、3Aを筆頭とする安倍陣営からの批判も強い。その他、野田聖子(幹事長代行)が立候補に意欲を見せており、竹下派が支持する茂木敏充外相、下村博文政調会長の立候補などが取りざたされている。

総裁選の争点と衆院総選挙

最大派閥の細田派(清話会)にしても、二階派・麻生派も、派閥全員が同じ候補者に投票ということにはならない。今回の総裁選は派閥という枠組みから外れ、中堅・若手の意思が結果を大きく左右することになるだろう。

その観点から総裁選を眺めてみよう。

まだ立候補者が出揃ったわけではないが、岸田文雄・石破茂・河野太郎・高市早苗の4名が上位にくることは確かだ。しかし、先に述べた通り、菅の出馬見送りで岸田は大きく後退してしまった。今後、劇的な変化でもなければ、中堅・若手の支持は厳しい。その意味で石破・河野・高市の3名が一步リードしていると見る。

これは「安倍晋三路線継承」の高市と、「反安倍」の石破・河野と見ることもできる。軸足の位置は三者とも異なる。石破はアジアに軸足を置き、河野は親英国・親欧州、高市は米国べったりだ。結果を大きく左右する若手票、地方票を考えると、一部から言動が敬遠され、失言の数の多い河野が一步後退する。

結果として、石破と高市の争いとなる可能性が高い。この二人であれば、新鮮味という意味では甲乙つけ難い。「安倍継承の高市」か…「反安倍の石破」か…ということになりそうだ。石破が5度目の正直を果たすか、初の女性宰相誕生か。どちらにしても話題は豊富だ。

自民党総裁選は公職選挙法に縛られるものではない。過去には**実弾**(現金)が飛び交った例もある。今後の活動次第で、若手票・地方票は大きく変化する。

17日に立候補者の顔ぶれが勢揃いしたところで、改めて総裁選を展望してみたいと思う。自民党が総裁選で盛り上がり、政策論争が活発化した後に衆院総選挙が行われる。自民党には勢いが残り、野党には力がなくなっている。

よほど強力な政策を掲げない限り、野党大躍進は望めない。これまでのように新型コロナの対策不足を糾弾しているだけでは絶対に勝てない。我が国の未来のためにも、野党陣営に相当な覚悟を期待したい。■